

優秀作品賞

「人間ドックが教えてくれたもの」

後藤 喜朗さん

「オール A ですよ。とても健康体です。何か特別なことをされたのですか。」

人間ドックの最後の問診で上品な女医から笑顔で伝えられた。メタボのお腹が目立っている受診者が溢れる中で、一際スリムな私に違和感をもたれたのだろう。本来、喜ぶべきことではあるが、私の胸中は非常に複雑であった。元来、私は、中学校の英語教員であるが一年間の限定で民間企業研修、それも全国展開をするスーパーに派遣されていた。勤務先の校長からは、「最先端のマネジメントを学べますよ。」と言って送り出されたのだが、現実はそんなに甘くはなかった。当たり前の土日勤務、早朝から深夜までのシフト、商品の陳列を誤って正社員から叱られたこともあった。また、仕事中は、立っているか走っているかの生活であり、気が付くと八十キロにリーチがかかっていた体重は十五キロもダウンをしていた。食事は、決まった時間にきちんと摂ってはいたものの、おそらく激しい運動量とストレスにも起因をしているのだろう。私は自分の本意ではないスーパーでの民間企業研修に嫌気が差し、真剣に教員を辞めようとさえ思っていた。無論、頭の中では研修の意味や責務の重大さを理解してはいるが、「研修から一刻も早く逃げ出したい。」という思いで、自暴自棄になっていた。

人間ドックが終了し、着替えを済ませた私は「これからまたスーパーの仕事か。」という思いで憂鬱な気分になっていた。車に乗ろうとした時、電話が鳴った。珍しく父からの電話であった。嫌な予感が脳裏をかすめた。

「おかあちゃん、危ないぞ。すぐに病院に来い。」私の母は、肝臓癌で入退院を繰り返していた。病院に到着した時、母の意識は既に朦朧としていた。母は、最後の最後まで精一杯生きようとする生き様を見せてくれたが、私が到着するのを待っていたかのように息を引き取った。その瞬間、私は人目をはばからず号泣してしまった。父は、母の手を固く握り締めていた。父の目から一筋の涙が流れ落ちた。商売人であり昔気質の父の涙を見たのは初めてであった。決して

て人前で涙を見せる父ではなかった。「早く健康診断をさせてやればよかった。本当にすまん。」と父は嘆きと呻きにも近い声を絞り出していた。

私が生まれた頃、我が家は非常に貧しかった。私の小学校時代のあだ名は「ビンボー」であった。父が事業に失敗し、自営の会社が倒産し、莫大な借金が残った。思い出がいっぱい詰まった実家は他人の手に渡った。当時私の身体は小さく、衣服も非常に汚かったため、ガキ大将の標的になり、周りからも酷いじめに遭っていた。父と母はそんな逆境を真摯に受け止め、昼夜を問わず骨身を削って働いた。今から思うと我が家には健康診断や人間ドックを受けるお金も厳しかったと推察される。「貧乏で母に辛い思いをさせた。健康診断や人間ドックも満足に受けさせてやれなかった。」父親の涙は、そうした悔しさを象徴する涙でもあったのだ。

私が号泣したのは、母を亡くした辛さや悲しみもある。しかし、母の死に直面した時、「オール A」という結果を素直に受け入れることができなかつた自分を非常に恥ずかしく思ったのだ。「何で自分がスーパーで研修をしなければいけないのだ。」という勝手な思いが先行し、私は体裁や世間体ばかりを気にしていたのだ。今では既に手遅れであるが、私の人間ドック「オール A」の一つでも母に譲ることができればと真剣に思った。

職場での勧めもあり、私は人間ドックの事後指導を受けることにした。部屋に入ると担当の保健師から「あれ、先生じゃないですか。」と声を掛けられた。名字が変わっていたので最初は分からなかったが、私が担任をした生徒であった。教員をしているとこうした経験は実に多い。教員の仕事は激務であり、志望者が減少傾向であるが、私は子どもの成長こそが教員の最大の褒美であると考えている。だからこそ教職に生き甲斐を感じている。「先生、オール A なんて凄いですよ。家族の方も喜ばれますね。子どもも元気な先生が大好きですからね。」教え子の保健師が笑顔で事後指導をしてくれた。私が教え子の保健師から教えられた。

このように人間ドックには、様々な人間模様やドラマがある。母が人間ドックを受診していたら肝臓癌が早期発見され、今も延命しているかもしれない。

私が、民間企業研修に行かなかつたらメタボのままで成人病と格闘しながら一

生きているかもしれない。私は、心も体も人間ドックに救われたような気がしていた。人間ドックは、人生の縮図でもある。そうした貴重な邂逅を与えてくれた人間ドックに感謝をするとともに健康管理に一層心を配りたいと決意を新たにした。私は、母の仏前で改めて人間ドックの結果を報告した。